

---

---

フランス王家ゆかりの携帯用ポリプティック型聖遺物容器《リブレット》についての一考察

---

---

フランス王シャルル5世(在位1364-1380年)によりパリで注文され、次弟アンジュー公ルイに贈られた聖遺物容器は、掌に収まる小さな本のような形態から《リブレット》と呼ばれ、中央にはキリスト受難の聖遺物19点、両翼には聖人の聖遺物72点が収められている。ルイの死後メディチ家等を経て、現在はフィレンツェ大聖堂博物館の所蔵に帰している。本作はヴァロワ朝期の優れた金細工工芸の数少ない現存作例であるにも拘らず、フランス国外にあったためか、等閑視されがちであった。

かつて東ローマ皇帝の権威を支えたキリスト受難ゆかりの聖遺物は、1239年にカペー朝聖王ルイ9世がラテン帝国皇帝ボードワン2世から入手したもので、その保管のためにサント・シャペルが建立された。これら護国的な聖遺物の所持は、カペー朝との血縁的連続性を持たないヴァロワ朝にとって、王権の正当性を主張するために一層誇示された。本作に収められているのは、これらフランス王室の誇る聖遺物からの断片であった。シャルル5世はナポリへ向かう弟に対して、いわばフランス王族としての権威付けのためにも本作を贈ったと発表者は推測する。

ヨーゼフ・ブラウンはその著『聖遺物容器』(1940年)において本作を「パネル型聖遺物容器」と大別してはいるが、外形による分類に留まっている。そこで、本発表では長方形の中央パネルに注目し、これをビザンティンで制作された聖十字架の聖遺物容器(スタウロテク)の西欧での受容の一発展形と位置付ける。東方とは異なり西欧の作例では、聖十字架以外の聖遺物もクリスタルの窓等を設けて常に視認できる構造をとった。しかし、西欧での先行作例が中に収められた聖遺物の同定に銘文やラベルを必要としたのに対し、金板に削り貫かれた穴の独特の形によって聖遺物の同定が出来るという点が本作の特徴である。

また中央の金板に穿たれた穴の形象が所謂アルマクリスティ図像であると指摘し、ここでのその機能について考察する。アルマクリスティ図像とはキリスト受難に関する事物を形象化したものであるものの、受難の聖遺物とは独立したかたちで普及し、14世紀には主に個人的な祈念の補助手段として写本彩飾や板絵等に描かれた。個々の図像は物語性を排した記号的性格を有し、観者はそれらを任意に組み合わせて瞑想を行う。シャルル5世周辺の写本にも多く作例が見られ、本作にも祈念的機能が与えられていた可能性が高い。さらに本作では、中央パネルのアルマクリスティの形に穿たれた穴に、それぞれの実物である聖遺物の断片がサント・シャペルから収められることで、キリストの臨在が保証されていたが、これはフランス王家の一員にしかなし得ないことであった。本作は、フランス王家の権威を伝える威信財であると同時に、祈念的機能を帯びた、限られた者のみに所持が許された極めて特権的な聖遺物容器であると言える。